 (C)下野新聞社

「遺体の感触消えない」

「ヒロシマ講座」で証言

広島市の被爆者・河野さん(84)

言葉の力信じ伝える

とちぎ戦後70年 広島から

被爆体験や平和への思いを語る河野さん。「言葉には人を動かす力がある」と証言を続ける＝7月29日午前、広島市

つま先に触れた遺体の感触は消えない。今も橋を渡るたび、助けを求める女性の声がよみがえる—。広島市の国内ジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」(7月28日〜8月7日)で、同市の河野キヨ美さん(84)は記者を前に、今も忘れぬ被爆の記憶を語った。原爆投下から6日で70年。時折目を伏せ、苦しげな表情を浮かべながら「あの時」を振り返った。

1945年8月7日、14歳の河野さんは爆心地から35㌔離れた自宅を出て広島市中心部に向かい、被爆した。原爆投下の翌日。「大きな爆弾で広島は全滅した」。近所のうわさで聞いた。市内の病院で働く姉の遺骨を拾うつもりだった。

一面焼け野原。遮る物はなく、瀬戸内海の島もくっきり望めた。無数の遺体は足の踏み場もないほど。電車の中に、炭になってぶら下がった腕が見えた。

病院にたどり着くと、姉には会えなかったが同僚から無事を知らされた。だが、安堵したのはつかの間。病院の玄関前にあった大きな円形の花壇の様子は、「忘れられぬ光景」として脳裏に刻まれた。

円形に合わせるように、頭を中心に向け放射状に並べられた遺体。名札を見ると、同年代の中学1年生だった。その顔は眠っているようにも見えた。

空襲に備え、家を取り壊す建物疎開に動員された少年たちだった。「肉親にみとられることなく次の日、病院の横で焼かれたそうです」。若くして絶命した少年たちを思い返し、河野さんは目を伏せた。

戦後、河野さんは「自分はけがもしてない」と体験を語るのをためらっていた。だが70歳を過ぎたころ、自身の高齢化を考え、「記憶を残したい」との思いが強くなった。「絵に描いてほしい」と訴える少年たちの夢も見た。あの日見た「忘れられぬ光景」を描いた。

少年たちの絵が、悲惨な記憶を心にとどめていた河野さんの背中を押した。「多くの犠牲があり、今の平和があることを知ってほしい」。今は国内の中高生たちに証言を重ね、海外で体験を語ったこともある。

「一人一人は小さな声でも、核廃絶や平和への願いが集まれば、大きな力になる。そう信じて証言を続ける」。河野さんは顔を上げ、力を込めた。

(横松敏史)